

Title	意図の認識と主体感(the Sense of Agency)の発達
Sub Title	
Author	大泉, 郷子(Oizumi, Kyoko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005. ) ,p.260- 262
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0260">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0260</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の言語遮蔽効果は必ずしも安定して認められるものではなく、場合によっては促進効果が見られることもあり、論争が続いている。伊東君は憶えるべき対象の記憶の程度によって、二つの方向の異なる効果が出現するという仮説を立て、対立効果加算モデルを提唱した。このモデルでは 1) 顔の記憶には言語化可能な特徴によるものと言語化不可能な特徴によるものがある、2) 再認前の言語化は言語化可能なものへ注意を向けさせる、3) 再認時に言語化不可能な特徴がどの程度利用できるかは記憶の程度に依存するが、言語化可能な特徴は記憶の程度による変化を受けにくい、とされる。このことから記憶がよい場合には言語化の妨害効果が生じ、記憶がわるい場合には促進効果が生じ、また、再認が困難な条件では言語化は妨害的に、容易な条件では促進的に働くことが予測されたとしている。

著者は詳細な文献研究の後、上記モデルを提唱し、さまざまな方法で 1) 記憶がよい条件と貧弱な条件、2) 再生が困難な条件と容易な条件、を設定し、モデルの予測を検討している。実験 1 では保持時間の違いによって記憶の程度を操作している。すなわち記銘直後に再認を行う条件と 1 週間後に再認を行う遅延条件の比較である。実験 2 では再認刺激セットの類似度を低めて(再認が易くなる)、実験 1 の確認を行っている。実験 3 では遅延条件を 60 分とし、保持時間中に別の顔異同課題を課すことによって記憶を低下させている。実験 4 では記銘時の刺激提示時間を短時間条件と長時間条件とすることによって、記憶の程度を変化させている。実験 5 では CG を用いて再認刺激セットの類似度を高めている(再認は難しくなる)。なお、実験 4, 5 では刺激は動画である。これまでの実験は参加者が積極的に記銘を行うものであったが、実験 6 は日常に近い条件として偶発学習の事態を用いた。すなわち、教室に教員の代理としてある人物が現れ、10 分間そこにとどまる(実際には小テストを行う)。そして、教室にいた学生にこの人物の記憶を再認させるものである。

これらの系統的な実験の結果、著者のモデルから予測される「記憶がよい場合には言語化は妨害効果を持ち、わるい場合は促進効果を持つ」ということが一貫して指示された。さらに、再認刺激セットの類似度が高い場合、すなわち再生が難しい場合には言語化妨害効果は見られたが、低い場合には効果が消失した。しかし、再認刺激セットの類似度の操作による再認の困難度と記憶の程度との相互作用は必ずしも有意なものではなく、著者のモデルにはなお修正されるべき余地があると思われる。

一連の実験により、著者の一番の主張である記憶の程度による言語化効果の変容は十分に実証されたと考えられる。このことは記憶過程の基礎的な理解のみならず、応用的にも重要な寄与をなすものである。しかしながら、顔の言語化不可能な特徴とは何なのかが結局明確ではなく、また、すべての実験データを総合しての記憶の程度と言語化効果の関係の定量的な分析がなされていないといった残念な点がないわけではない。これらは今後の研究課題となろう。全体を通じて、良く計画された完成度の高い論文であり、また、先行研究との比較検討も十分なされている。本学位請求論文は本塾論文博士(心理学)に十分値するものと判定される。

博士(教育学) [平成 16 年 10 月 13 日]

甲 第 2309 号 大泉 郷子

## 意図の認識と主体感 (the Sense of Agency) の発達

[論文審査担当者]

主 査 放送大学教養学部教授・前慶應義塾大学文学部教授

教育学博士

波多野 誼余夫

副査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員  
博士（教育学）

安藤 寿康

副査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員  
文学博士

渡辺 茂

## 内容の要旨

本論文では、(1) 事前の意図（自分が何をしようとしていたか）・行為中の意図（自分は今何をしているか）・行為経験（行為の主体感）の諸認識の発達の関連性を検討することにより、活動場面における子どもの意図の認識過程を明らかにすること、(2) 行為の主体感（行為経験）や活動意図が、活動に与える影響を検討することを目的とした。具体的には、大きく分けて2種の課題（ジグソーパズル課題・ぬいぐるみ探し課題）を利用し、次のことを検討した。(1) 幼児が一連の活動を行う際に、活動に対する行為者の事前の願望や事前の意図がどのように影響するのか、(2) 活動中の行為の認識と概念レベルの意図の認識との関連性、特に活動中の「主体感（行為経験）」と意図の認識との関連性、(3) 意図の認識メカニズムの関連要因、特に、活動に伴って生じる情動が意図の認識に与える影響、の検討である。ジグソーパズル課題では、3歳児から7歳児を対象に、一連の活動における事前の意図の再認能力と活動中における「主体感（行為経験）」の認識能力との関連性について検討した。ぬいぐるみ探し課題では、3・4・5歳児と成人を対象に、活動結果が「主体感（行為経験）」に与える影響を主に検討した。

結果として、実験1・2・3のジグソーパズル課題において、自分が作ろうとしていたパズル（リスのパズル）が完成しなかったという状況下で、「あなたは何をしようとしていたか」と事前の意図を問われた際に、幼児は結果的に出来上がったパズル（リス）を作ろうとしていたと答える意図現状主義が多く、小学1年生においては自分が実際に作ろうとしていたものではなく作りたかったものを答える意図願望主義が見られ、小学2年生になり事前の意図を適切に答えられるようになるといった発達の变化が明らかになった。事前の意図の認識と行為主体感（行為経験）の認識との発達の関連性については、両者に直接的な因果関係は見られなかったが、事前の意図を正しく認識する能力と、現在の文脈と関連する行為に選択的に注意を向ける能力（行為中の意図の認識）が関係している可能性は示された。さらに、実験7のぬいぐるみ探し課題で、活動結果に伴って生じる自己の情動により行為主体感は大きく左右されることが明らかになった。このことから、4歳児の行為経験（行為主体性）の認識には当人の情動が影響することが示された。これは概念レベルの意図の認識が情動に影響される可能性を間接的に示す。最後に、本論文の一連の実験結果により、サールの示した「事前の意図」「行為経験」を含む活動全体にわたって、最終的な活動結果がその認識に影響を及ぼすことを示した。

## 論文審査の要旨

大泉郷子君提出の学位請求論文「意図の認識と主体感 (Sense of Agency) の発達」の審査は、査読の後、2004年7月9日に公開口頭試問を行い、主査、副査が合議した。その結果、審査者全員が本論文を博士（教育学）に相当するものと評価したので、慶應義塾大学大学院社会学研究科に報告する。審査の概要は以下のとおりである。

本論文は、発達心理学などの分野で注目を浴びている心の理論のうちで、とくに意図に焦点を当てた

ものである。心的状態のうち、欲求、信念、感情にくらべ、意図の研究は数少なく、その意味で、先駆的なものと評価しうる。

本論文は、(1) 事前の意図(自分が何をしようとしていたか)・行為中の意図(自分は今何をしているか)・行為経験(行為の主体感)の諸認識の発達の関連性を検討することにより、活動場面における子どもの意図の認識過程を明らかにすること、(2) 行為の主体感(行為経験)や活動意図が、活動に与える影響を検討することを目的としている。具体的には、論文提出者が自分で考案した2種の課題(ジグソーパズル課題・ぬいぐるみ探し課題)を利用し、次の3点を検討している。(1) 幼児が一連の活動を行う際に、活動に対する行為者の事前の願望や事前の意図がどのように影響するのか、(2) 活動中の行為の認識と概念レベルの意図の認識とはどのように関連するか、特に活動中の「主体感(行為経験)」と意図の認識との関連性、(3) 意図の認識メカニズムの関連要因、なかでも特に、活動に伴って生じる情動が意図の認識に与える影響、である。

ジグソーパズル課題では、3歳児から7歳児を対象に、一連の活動における事前の意図の再認能力と活動中における「主体感(行為経験)」の認識能力との関連性について検討した。ぬいぐるみ探し課題では、3・4・5歳児と成人を対象に、活動結果が「主体感(行為経験)」に与える影響を主に扱ったほか、情動が意図の認識に与える影響についても検討している。

結果として、実験1・2・3のジグソーパズル課題において、自分が作ろうとしていたパズル(リスのパズル)が完成しなかったという状況下で、「あなたは何をしようとしていたか」と事前の意図を問われた際に、幼児は結果的に出来上がったパズル(ネズミ)を作ろうとしていたと答える意図=現状主義が多く、小学1年生においては自分が実際に作ろうとしていたものではなく作りたかったものを答える意図=願望主義が見られ、小学2年生になってはじめて、(現状や願望と区別された)事前の意図の認識と行為主体感(行為経験)の認識との発達の関連性については、両者に直接的な因果関係は見られなかったが、事前の意図を正しく認識する能力と、現在の文脈と関連する行為に選択的に注意を向ける能力(行為中の意図の認識)が関係している可能性は示された。さらに、ぬいぐるみ探し課題で、活動結果に伴って生じる情動により、行為主体感は大きく左右されることが明らかになった。このことから、4歳児の行為経験(行為主体性)の認識には情動が影響することが示された。これは概念レベルの意図の認識が情動に影響される可能性を間接的に示すものだ、と論文提出者は解釈している。本論文の総括として、ここでの一連の実験結果により、「事前の意図」「行為経験」を含む活動全体にわたって、最終的な活動結果がその認識に影響を及ぼすことを示した。

このように本論文は、実験的に新たな課題を構成し、それによって認知過程を実験的に検討するという、認知発達研究の王道をいくものであり、論文提出者の力量を感じさせる。もちろん、実験結果の解釈はさまざまあり得るし、作成者の意図どおりに子どもの側が課題と取り組んでいるという保証はないから、論文提出者の主張を本当の意味で実証的に裏付けるためには、もっと多くの実験を、さまざまな文脈で行う必要がある。その点からみると、本論文には、まだ粗さが目立つ点も少なくない。しかし、理論的には重要であるにもかかわらず先行研究の乏しい「意図」に正面から切り込もうとする論文提出者の姿勢には共感しうるし、またそのための実験手法にも非凡さが認められる。こうした研究は一見、教育学に貢献するところが少ないように思われるが、最近の学習科学の動向などに現れているように、能動的、構成的、創造的な存在として学び手を捉えることは、長期的には教育の心理学的基盤を裕にするはずのものである。その意味で、本論文は博士(教育学)としてふさわしいものとする。